

〔原著〕 松本歯学 20 : 310~318, 1994

key words : 初診患者 - 紹介患者 - 顎関節症

松本歯科大学病院初診患者の実態調査  
—1974年～1993年における初診患者について—

野村寿男, 内田昌治, 鷹股哲也

松本歯科大学 口腔診断科 (主任 鷹股哲也 教授)

伊藤正明

Ito Dental Office

Clinical Observations on Actual Conditions of New Patients  
in Matsumoto Dental College Hospital  
—1974~1993—

TOSHIO NOMURA, MASAHARU UCHIDA and TETSUYA TAKAMATA  
*Department of Dental Diagnostic Sciences, Matsumoto Dental College*  
(Chief : Prof. T. Takamata)

MASAAKI ITO

*Ito Dental Office*

**Summary**

The number, district distribution and ethnological cause of new patients during twenty years from 1974 to 1993 were studied statistically. The results were as follows :

(1) The total number of new patients showed a gradual yearly increase except in 1984 and 1988. The number of the new patients from the area outside Shiojiri and Matsumoto Cities remarkably increased from 1989 to 1993.

(2) On the etiological cause of patients, the pericoronitis of wisdom teeth and apical periodontitis were the major diseases. The number of patients with dysfunction of temporomandibular joint showed a increasing tendency in recent years.

(3) On the age of patients with dysfunction of the temporomandibular joint, the number of patients in the teens and thirties was numerous while aged patients were scarce.

(4) The number of the aged patients (more than 65 years old) remarkably increased in the last three years.

緒 言

近年、医学・歯学に対する患者の需要は多岐にわたり、大学病院は第3次医療としての役割を担うようになってきた。大学病院の地域社会に対する責任の1つは、多くの患者の紹介を受け、適切な医療を実践していくことである。歯科大学病院でも、心疾患を初めとする循環器疾患、血液疾患、肝疾患、腎疾患など、難治性疾患を伴った患者の紹介が多く、初診時の対応も複雑化してきている。さらに最近の傾向として顎関節症患者、高齢患者の増加も見られる。そこで本学病院も開設20年を迎えたことから、過去20年間の初診患者の動向を把握する目的で実態調査を行なった。

調 査 資 料

調査対象は、本大学病院開設後の1974年1月より1993年12月までの20年間の初診患者とし、地区別に塩尻、松本、その他と分け、年別、月別に調査した。資料は本学病院医療事務統計資料を用いた。

また疾患別紹介患者動向、65歳以上患者、顎関節症患者では、初診時に用いる問診表、受付名簿および、本学病院カルテを参考資料とした。

調 査 結 果

1. 初診患者の推移 (表1 および図1)

過去20年間の初診来院患者数は77,113名で、塩尻地区24,543名、松本地区16,508名、その他の地区36,062名であった。

表1 および図1 に示すごとく、初診受診患者の年間推移<sup>1-3)</sup>を見ると、最初の3年間で来院数は急激に増加し、その後1982年まではほぼ横這いとなり、1984年、1988年で一時減少するものの、最近になり安定してきている。

塩尻地区においては当初の1974年は1,187名と初診来院患者総数の56.2%を占め、次年1975年は1,149名で41.9%を占めていた。1976年は1,971名で40.7%、1977年は2,015名で46.0%と増加したが、それからは徐々に減少傾向を示し、1990年以降3地区中最も少なくなっている。1993年では850名で全体の19.5%を占めるにすぎない。

松本地区からの来院数は、1974年400名(18.9%)、1975年551名(20.1%)、1976年が787

名(19.2%)と増加傾向を示すが、1977年以降は年間800人~900人程度にとどまり、ここ数年は900人代と、やや増加している。しかし、来院数の比率には、1993年で966名、22.2%と大きな変化は見られていない。

表1：過去20年間の初診患者の推移

	塩 尻	松 本	そ の 他	合 計
1974	1187	400	524	2111
1975	1149	551	720	2740
1976	1971	787	1347	4105
1977	2015	785	1580	4380
1978	1782	837	1862	4481
1979	1624	753	1963	4340
1980	1449	866	1886	4201
1981	1477	868	1929	4274
1982	1360	862	1985	4207
1983	1116	879	2003	3998
1984	939	784	1647	3370
1985	1002	844	1886	3652
1986	1081	967	1976	4024
1987	992	893	1887	3772
1988	906	827	1676	3409
1989	880	818	1858	3556
1990	807	889	2084	3790
1991	806	972	2285	4063
1992	830	950	2507	4287
1993	850	966	2537	4353
合計	24543	16508	36062	77113

単位 (人)

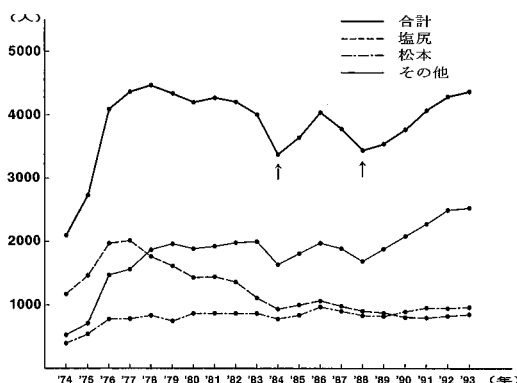


図1：過去20年間の初診患者の推移

その他の地区では、初診患者総数と変化が類似している。1990年頃まで少しずつ増加し、その後急増していることがわかった。1974年は524人(24.8%)に過ぎなかったが、2年後の1976年には1,000人を超え、1980年以降は全来院患者数の約50%を占めるようになっていく。

1984年および1988年では初診患者総数も、その他の地区の初診患者数も以降は増加傾向をたどっている。

以上の初診患者数推移から開院から昨年までの20年間は、5年ごとの4つの時期に分けることが出来るように思われる：(1)塩尻地区からの初診患者数が多い時期；(2)塩尻地区からの初診患者が急減する時期；(3)塩尻地区からの初診患者数が漸減する時期；および(4)その他の地区からの初診患者が増加する時期。

2. 月別初診患者数の推移

過去20年間の月別の初診患者数<sup>1)</sup>を5年毎にま

表2：過去20年間の初診患者の推移（月別）  
1974年～1978年まで  
累計

	塩 尻	松 本	その他
1月	754	284	458
2月	672	254	475
3月	649	328	524
4月	566	222	371
5月	849	272	482
6月	758	309	555
7月	781	294	548
8月	640	350	614
9月	647	261	478
10月	744	257	560
11月	721	268	488
12月	641	224	442

単位（人）

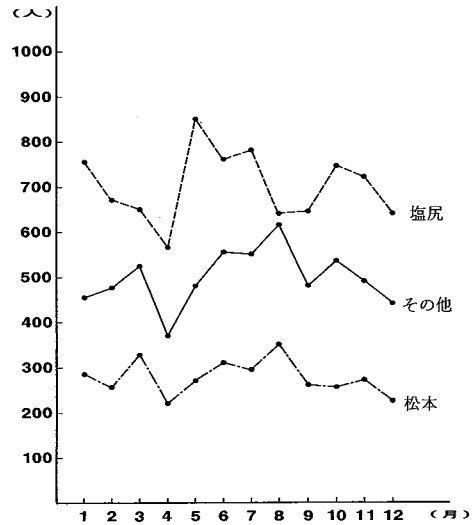


図2：過去20年間の初診患者の推移  
(1974年～1978年の月別累計)

表3：過去20年間の初診患者の推移（月別）  
1979年～1983年まで  
累計

	塩 尻	松 本	その他
1月	565	338	731
2月	613	336	742
3月	629	356	930
4月	514	268	704
5月	641	353	855
6月	696	479	909
7月	612	375	949
8月	461	337	895
9月	549	352	811
10月	692	385	789
11月	534	324	796
12月	492	330	655

単位（人）

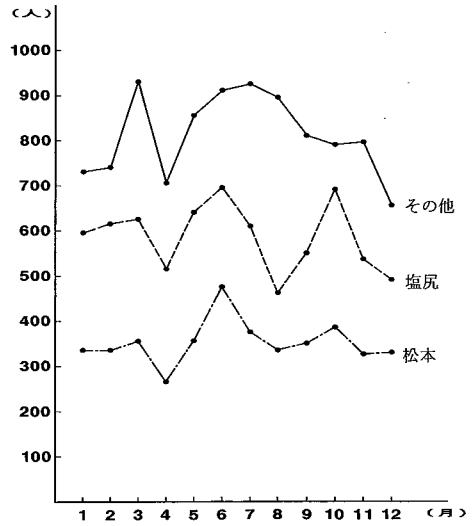


図3：過去20年間の初診患者の推移  
(1979年～1983年の月別累計)

とめ月別に分類した。

(1)1974年～1978年 (表2 および図2)

この5年間は、塩尻地区からの初診患者数が全体に40%以上を占めていた時期である。当然のことながら、3地区とも学校や会社の始まる4月、本学の休暇の多い8月が減少していたが、松本地区では8月に(350名)、その他の地区でも8月(614名)が最高を示した。塩尻地区では5月の849名が最高だった。

(2)1979年～1983年 (表3 および図3)

塩尻地区とその他の地区が入れ替わり、その他の地区の増加が見られるようになった時期である。その他の地区では3月に著しい増加、4月に減少という経過をたどった。塩尻地区の初診患者数は、特に10月に他地区とは異なる経過を示し多かった(特に1979年および1980年にこの傾向が強い)。

(3)1984年～1988年 (表4 および図4)

表4：過去20年間の初診患者の推移 (月別)  
1984年～1988年まで  
累計

	塩 尻	松 本	その他
1月	380	332	692
2月	411	331	705
3月	455	412	832
4月	335	320	693
5月	518	385	739
6月	455	297	931
7月	485	442	909
8月	337	319	681
9月	409	410	812
10月	443	398	794
11月	365	313	653
12月	327	286	571

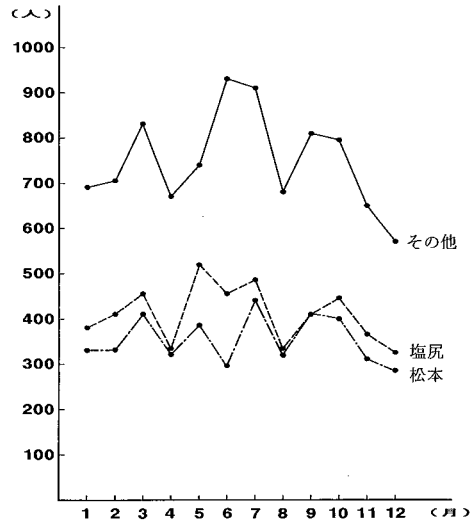


図4：過去20年間の初診患者の推移  
(1984年～1988年の月別累計)

表5：過去20年間の初診患者の推移 (月別)  
1989年～1993年まで  
累計

	塩 尻	松 本	その他
1月	285	322	818
2月	332	364	872
3月	350	427	1121
4月	398	387	841
5月	456	406	941
6月	349	408	1136
7月	347	337	1079
8月	299	402	901
9月	329	409	996
10月	388	400	965
11月	367	399	878
12月	327	347	822

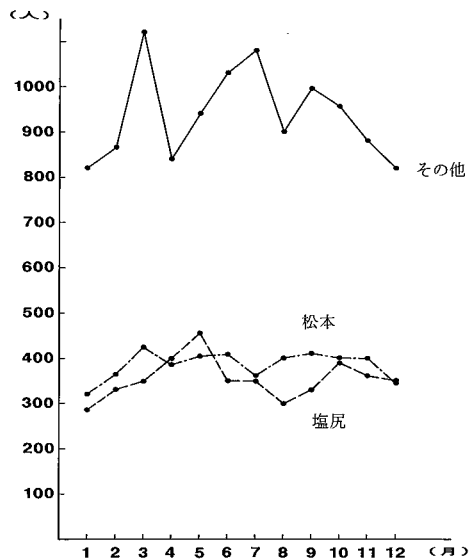


図5：過去20年間の初診患者の推移  
(1989年～1993年の月別累計)

単位 (人)

全体として塩尻，松本地区の来院数が減少し，3地区の患者数の分布が類似してきた時期である。その他の地区では4月，8月に減少傾向が見られた。この期間で特徴的なことは，1984年は減少の年となっている。

(4)1989年～1993年（表5および図5）

その他の地区で200人を超える月が現れて来る時期である。その他の地区では1990年で3月と8月，1991年では3月と6月～9月，1992年および1993年では殆どの月が200人を超えるようになってきている。

3. 疾患別紹介患者動向（表6，7および図6）

この調査は1993年10月より1994年8月までの11カ月間に来院した紹介患者に対して行なったもので，特に顎関節症患者の調査資料としても重要なものと考え行なったものである。

対象とする疾患は，智歯周囲炎(Perico)，齶蝕症(C)，歯髓炎(Pul)，根尖性歯周炎(Per)，歯周病(P)，および顎関節症の6疾患に大別し，これらに当てはまらないものを“その他”と分けることにした。智歯周囲炎で同時に2～3歯存在するものについても1名につき1疾患として扱った。

表6：疾患別紹介患者動向

1993年10月～1994年8月まで

	Perico	C	Pul	Per	P	顎関節症	その他	合計
'93. 10	30	7	2	13	3	7	34	96
11	41	3	1	11	8	4	28	96
12	30	7	2	14	4	5	20	82
'94. 1	42	1	2	10	4	9	25	93
2	43	4	6	13	2	8	40	116
3	38	2	0	18	8	18	43	127
4	33	0	0	15	6	6	36	96
5	40	1	2	15	3	14	37	112
6	36	2	0	17	10	12	38	115
7	42	2	2	12	8	11	34	111
8	26	0	2	7	2	11	18	66
合計	401	29	19	145	58	105	353	1110

単位（人）

表7：疾患別紹介患者動向（比率）

1993年10月～1994年8月まで

	Perico	C	Pul	Per	P	顎関節症	その他
'93. 10	31.3	7.3	2.1	13.5	3.1	7.3	35.4
11	42.7	3.1	1.0	11.5	8.3	4.2	29.2
12	36.6	8.5	1.4	17.1	4.9	6.1	24.4
'94. 1	45.2	1.1	2.2	10.8	4.3	9.7	26.9
2	37.1	3.5	5.2	11.2	1.7	6.9	34.5
3	29.9	1.6	0	14.2	6.3	14.2	33.9
4	34.4	0	0	15.6	6.3	6.3	37.5
5	35.7	0.9	1.8	13.4	2.7	12.5	33.0
6	31.3	1.7	0	14.8	8.7	10.4	33.0
7	37.8	1.8	1.8	10.8	7.2	9.9	30.1
8	39.4	0	3.0	10.6	3.0	16.7	27.3
平均	36.5	2.6	1.7	13.2	5.3	9.5	32.1

単位（％）

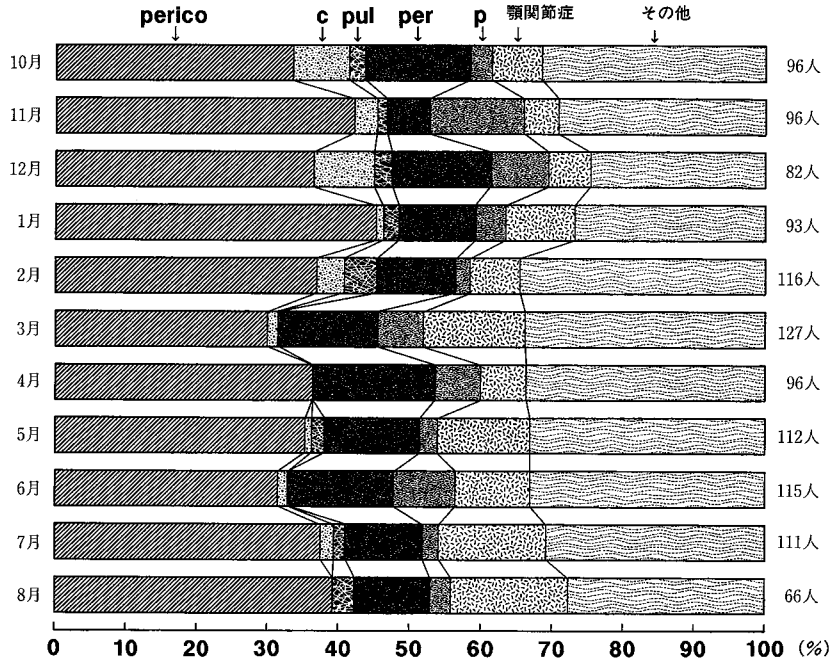


図6：疾患別紹介患者動向（1993年10月～1994年8月まで）

智歯周囲炎（Perico）患者来院傾向は月30～40人であり、平均36.5人、（35～40%）であった。

齶蝕症（C）および、歯髄炎（Pul）で来院する初診患者は極めて少なく数%に留まり、全く来院しない月が、齶蝕症では1994年4月と8月、歯髄炎では1994年3月、4月および6月であった。

根尖性歯周炎（Per）は、歯槽膿瘍（AA）および歯根嚢胞（WZ）を含めて調査した。この疾患に関しては、月毎の来院傾向は15人前後（10%～15%）であり、平均13.2%で、比率では第2位となっている。

歯周病（P）については歯肉膿瘍（GA）を含めて調査した。歯周病では紹介患者が少なく、全身疾患のある患者等だけの来院と思われる。

顎関節症患者の来院総数に対する紹介数の割合（紹介率）は高く、疾患の第3位であり、平均で9.5%であった。

4. 顎関節症患者の動向（表8および図7）

調査は1993年10月～1994年9月までの12カ月間に本学に来院した初診患者で、後に顎関節症と診断されたものについて行なった。来院患者は10歳代～80歳代で0歳～9歳および90歳以上は来院がなかった。

来院総数においては、10歳代と20歳代が共に57人で24.0%と最大<sup>4-10</sup>となっており、10歳代、20歳代だけで約半数を占めていた。年齢が増加するに連れて減少する傾向が見られ、60歳以上の来院は数%に留まった。

紹介患者では10歳代が多く、27人で24.1%、20～50代で約16%、60歳以上では数%にすぎなかった。紹介率は10歳代が47.4%、40歳代が69.2%でピークがみられ、20歳代は31.6%で最小であり、80歳代は調査した3名全てが紹介患者であった。

紹介率の平均は47.1%でほぼ半数が紹介患者という結果であり、高い値となった。この期間の初診患者総数は4,454名であり紹介数は1,233名あり、この比率は27.7%で、約1.7倍という値が得られ、他の疾患と比べ紹介率が高いことがわかった。

5. 65歳以上患者の科別受診総数（表9および図8）

1991年～1993年の3年間で本学病院に来院した65歳以上の高齢者を対象に調査した。1991年の来院数は277名で初診総数4,063人中の6.8%を占め、1992年では314名で7.3%、1993年で327名で7.5%だった。

増加人数では、1991年～1992年が37人、1992年

表 8：年齢別顎関節症患者動向

1993年10月～1994年9月まで

	紹介数 (人)	百分率 (%)	総数 (人)	百分率 (%)	紹介数/総数 (%)
10歳代	27	24.1	57	24.0	47.4
20歳代	18	16.1	57	24.0	31.6
30歳代	16	14.3	39	16.4	41.0
40歳代	18	16.1	26	10.9	69.2
50歳代	18	16.1	31	13.0	58.1
60歳代	8	7.1	17	7.1	47.1
70歳代	4	3.6	8	3.4	50.0
80歳代	3	2.7	3	1.3	100.0
合計	112	100.0	238	100.0	平均 47.1

百分率は小数第2位を四捨五入

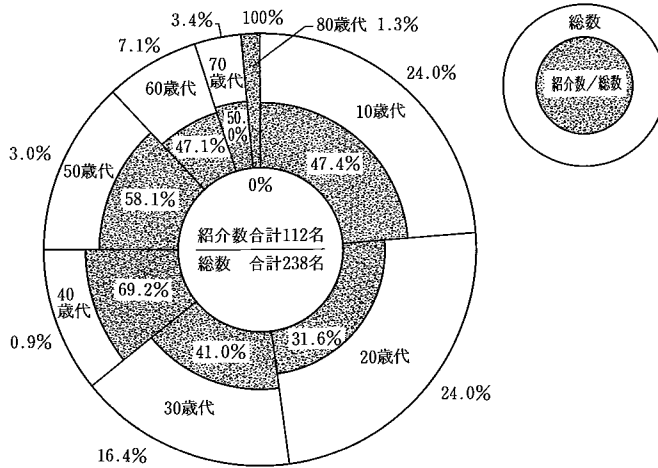


図 7：顎関節症患者の動向 (1993年10月～1994年9月まで)

表 9：65歳以上患者の科別受診総数

	1991	1992	1993	合計
保存 1	17	16	12	45
保存 2	13	19	22	54
補綴 1	77	75	76	228
補綴 2	15	25	18	58
口外 1	62	72	83	217
口外 2	80	92	100	272
口 診	—	—	2	2
特 診	10	9	10	29
麻 酔	0	2	0	2
予 防	3	4	4	11
合計	277	314	327	918

小児歯科、矯正歯科を除く。 単位 (人)

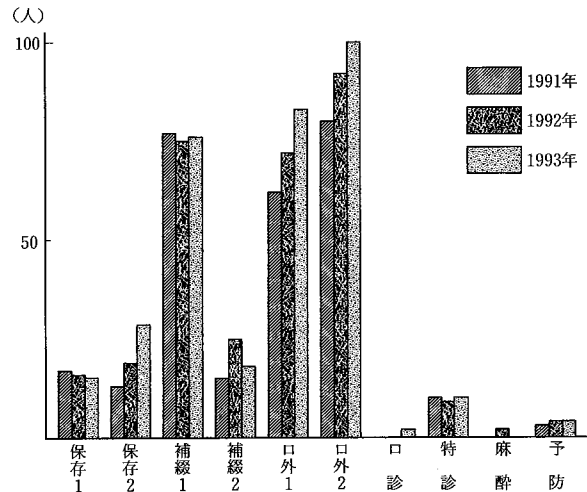


図 8：65歳以上患者の科別受診総数

～1993年が13人であり、僅かながら増加していることが分かる。歯周病科では毎年僅かながら減少傾向がみられ、第2補綴科では1992年～1993年に減少がみられたが、その他の科では増加していた。

## 考 察

### 1. 過去20年間の初診患者の推移

初診患者の合計は開設当初の3年間で急激に増加しているのは、塩尻地区とその他の地区からの来院が大きな要因であるが、これは塩尻地区、その他の地区において歯科医院が少なかったために、歯科医療を本学に依存しようとした傾向があったためと思われる。1984年の減少についてはこの時期に保険制度が1割負担<sup>1)</sup>となった年であり診療回数が多いために医療費の負担の多い歯科治療において影響があったことが原因と思われる。1986年の増加は1984年の反動とも思えるが推測の域を出ず、1988年までの減少した理由については現在調査中である。1988年以降、増加傾向にあったのは長野自動車道開通(1988年)、臨床実習の改正(1990)、初診受付の延長(午後まで)などが原因と思われる。

塩尻地区では先にも述べたように開設後3年間は増加したものの、その後は減少傾向を示し1990年以降、現在では松本地区より少ない来院数となっている。これは塩尻地区に新しく歯科医院が開設されてきたためと、診療時間が長く治療回数の多い大学病院は敬遠されたためと思われる。

松本地区は穏やかな増加傾向で人口増加と比例しているのではないかと考えられる。

その他の地区では合計と類似しており原因も同様と考えられ、地区の歯科医院の不足、保険制度改正、交通網の充実が原因と思われる。

今後の見通しとしては、歯科治療に関する患者の意識が高くなって来ている現在、これ以上の各地区での減少はなくなるのではないと思われる。

### 2. 月別・過去20年間の初診患者の推移

#### (1)1974年～1978年

塩尻地区では年度始めの4月、本学の休業となる8～9月、12月に減少し、5月の連休など休業開けて増加している。

松本地区では4月、12月の減少は塩尻地区と類似しているが8月で最高となり休日の急患が多

かったものと思われる。

その他の地区では松本地区より数量的には多いもののよく似た傾向を示し、原因も塩尻地区と同様と思われる。

#### (2)1979年～1983年

塩尻地区では全体的には減少したものの増減には特異的な変化はなかった。10月に増加するのは小中学校の休暇が関与していると思われる。

松本地区では8月が減少となった。本学の休業時期が認識されたためと思われる。

その他の地区ではまだ8月の来院は多く見られる。

#### (3)1984年～1988年

月の増減が類似しており来院が安定してきたものと思われる。塩尻地区の減少は歯科医院の開設のためと思われ、その他の地区の増加は第三次医療としての役割が顕著となってきたことが推測される。

#### (4)1989年～1993年

第3次医療の安定が進んだことが推測され1994年7月現在で、松本地区で22.1%、塩尻地区で17.2%、その他の地区は木曾郡(7.2%)、茅野市(7.2%)、東筑摩郡(6.7%)、南安曇郡、岡谷市(5.6%)等となっている。なおこの地区ごとの推移については今後の課題としていきたい。

### 3. 疾患別紹介患者動向

智歯周膜炎(Perico)は紹介患者の30～40%(平均36.5%)に相当する。疾患では第1位であり大学病院に紹介する疾患の主要なものとなっている。

齶蝕症(C)、歯髄炎(Pul)の紹介については全身疾患など開業医では治療困難な疾患を持っている患者と思われる。

根尖性歯周炎(Per)は過去の粗悪な治療から難治性となるもの、冠脱落から根管治療となったものが含まれると思われ比率では第2位となっている。

歯周病(P)についても紹介患者は少なく齶蝕症、歯髄炎と同様の理由と思われる。

顎関節症では増加傾向があるように思われるが、これは最近TV、雑誌等で取り上げられることが多く、治療が難しく時間がかかることもあり、大学で治療する疾患の主要な疾患となり始めている。



#### 4. 年齢別顎関節症患者動向

来院総数で10歳代と20歳代が最高値を示し、これは20歳代と50歳代にピークがあるという報告<sup>4,8,9)</sup>と異なる結果となった。調査期間が短いためと思われるが新たな傾向かも知れず、今後の調査が必要である。50歳代までで90%近くを占め、高齢者の顎関節症患者の来院傾向は少ない。しかしこれは潜在的患者が多い<sup>12)</sup>ことも考えられ、患者数と来院数が一致していないものと思われ、今後も調査の必要性が考えられた。

#### 5. 65歳以上患者の科別受診総数

1991年～1993年の3年間での増加傾向はわずかであった。しかし高齢者の口腔疾患保有率は高い<sup>12-14)</sup>と思われ、年齢別調査の項でも述べたが治療してもらいたくも出来ずにいる潜在的患者の存在が考えられる。今後はこの点についても引き継ぎ調査を行なう予定である。

科別では第1補綴科および第1、第2口腔外科の来院が多く、その他の科との来院との違いが顕著であり、高齢者治療で重要な科となっていることがわかった。

### 結 論

本学病院に1974年から1993年まで20年間に来院した初診患者（一部、1994年を含む）について調査した結果、以下の結論が得られた。

1. 過去20年間で1984年、1988年に初診患者の減少がみられたが現在は安定した増加傾向にあり、地方からの来院が増加している。

2. 疾患別では智歯周囲炎、根尖性歯周炎が主要疾患となっており顎関節症が増加傾向にあった。

3. 1993年から1994年にかけて顎関節症患者の年齢別の動向では本疾患は10代、20代に多く、高齢者では少ないという結果が得られ、10代、40代で紹介患者としての来院数が多い傾向にあった。

4. 1991年から1993年の3年間において、高齢者65歳以上ではわずかな増加傾向がみられ第1補綴科および第1、第2口腔外科に集中していた。

### 文 献

1) 鶴田敬司, 梅田浩将, 鳥山和茂, 尾崎雄一郎, 高

橋利近, 西嶋克巳(1988) 岡山大学歯学部附属病院開設後5年間の総合診断室における患者の推移. 日本口腔診断学会雑誌, 1: 141-145.

- 2) 高木 慎, 赤木真人, 高松英也, 角南考昭, 小林弘治, 井奥尚也, 三宅教夫, 平岩 弘, 角南次郎, 春名美佐紀(1982) わが教室における10年間の外来患者の臨床統計的観察. 岡山歯誌, 1: 75-79.
- 3) 児野喜穂, 菊地 白, 沖野由美(1984) 本学口腔外科学教室開設以来10年間の外来初診患者の推移. 帝京医学雑誌, 7: 397-403.
- 4) 藍 稔(1983) 顎機能異常・咬合からのアプローチ, 3版, 19-28. 医歯薬出版株式会社, 東京.
- 5) 岡 達(1989) 顎関節疾患と顎関節症. 歯界展望別冊, 顎関節症の臨床, 6-12, 1989.
- 6) 辰巳佳正, 匠原悦雄, 細井栄二, 林 真千子, 湯村典子, 橋本多加, 三浦健司, 川上哲司, 高崎真一, 松下公男, 堀内敬介, 杉村正仁(1990) 顎関節症患者の症型分類による臨床統計的観察. 日本顎関節学会雑誌, 2: 98-112.
- 7) 鱒見進一, 有田正博, 守川雅雄, 村上繁樹, 内田康也, 豊田静夫(1990) 九州歯科大学付属病院補綴科来院患者の統計的観察(1979-1983年) 第4報 いわゆる顎関節症患者について. 九州歯科学会雑誌, 44: 376-380.
- 8) 許 重人, 渡辺 誠, 佐々木啓一, 田辺泰一, 稲井哲司, 菊地雅彦, 小澤一仁, 服部佳功, 目黒 修, 小野寺秀樹, 斉藤 寛, 後藤正敏, 高橋智幸(1992) 顎関節症の臨床像に関する研究. 日本補綴歯科学会雑誌, 36: 783-790.
- 9) 迫田隅男, 芝良 裕, 真鍋敏彦, 陶山 隆, 佐藤耕一, 錦井英資(1990) 顎関節症の臨床統計的観察 過去10年間の臨床統計と予後調査. 日本顎関節学会雑誌, 2: 79-88.
- 10) 藤村和磨, 村上賢一郎, 瀬上夏樹, 横山忠明, 陳文熙, 野瀬将洋, 宮木克明, 森家祥行, 陳 亮宏, 兵 行忠, 飯塚忠彦(1990) 顎関節症200例の症型分類と臨床検討. 日本口腔科学会雑誌, 39: 683-690.
- 11) 歯科統計資料集1993・1994年版. (1993) 1版, 95. 財団法人口腔保健協会, 東京.
- 12) 白浜立二(1991) 施設入居高齢者の口腔健康状態と治療必要性に関する研究. 九州歯科学会雑誌, 45: 220-238.
- 13) 大谷一郎(1991) 北九州市在宅高齢者の口腔健康状態と治療必要性に関する研究. 九州歯科学会雑誌, 45: 653-667.
- 14) 植松 宏, 梅崎伸子(1992) 埼玉県内の特別養護老人ホームにおける歯科医療の実態—施設へのアンケート調査より—. 老年歯科医学, 7: 14-19.